

2008年度第5回物学研究会レポート

「不況ニッポン、どうするか」

安藤忠雄 氏

(建築家)

2008年8月27日



BUTSU GAKU
物学研究会
SOCIETY OF RESEARCH & DESIGN

8月の物学研究会は、建築家、安藤忠雄さん。三度のご登場です。現在、安藤さんは建築家という枠を越境し、未来の社会や環境までも視野に入れた幅広い活動を実践されています。そんな不屈の精神を持った安藤さんが、「不況ニッポン、どうするか」をテーマにご講演くださいました。以下は、講演内容を抜粋し、レポートとして再構成したものです。

「不況ニッポン、どうするか」

安藤忠雄 氏

(建築家)

●ニッポンの底力

現在、安藤忠雄さんは、日本以外にメキシコ、ニューヨーク、ボストン、シカゴ、ロサンゼルス、サンタフェ、バーゼル、ベニス、ミラノ、マルセイユ、アブダビ、ドバイ、バーレーン、スリランカ、中国、韓国、台湾などなど、世界中で30以上の現場を動かしている。国内も地元関西の仕事は2割程度、多くが東京であるという。1カ月に1度は世界を一周しているというスケジュールであるにもかかわらず、「安藤さん、よう時間ありますねえ」と不思議がられるそう。

そんな安藤さんが日本について感じていることは、リーダーがいない、国民が平和ボケしている、前を見ている人がいない、目標がないなど。最近の「不況ニッポン」の根底には、日本人の人間力の低下があるのでないか。人間だけでなく、企業も、国も目標を持ってないのではないかと分析している。今講演は、「さあ、ニッポン、これからどうしようか？」に対する安藤流の提言である。

まず、一般レベルで日本が誇るべきこと。クルマや電化製品、ITなどの技術力。長寿国であること、特にコミュニティ形成能力の高い女性の長寿ぶりはスゴイ。建築分野では鉄鋼技術と日本の建築現場の品質やスケジュール管理の素晴らしさ。海外の現場で苦勞が耐えない安藤さんは、定年退職前

後の日本人の優れた現場監督に声をかけて、海外の自分の現場で仕事をしてもらっている。ほとんどの人は定年後の新たな活躍場所を得ることに成り、安藤さんの申し出を快諾してくれるそうだ。もちろん単身赴任。彼らの妻は日本に残り、夫がいなくても自分のコミュニティで幸福に暮らすことができる。元気な女性を見るたびに、男性も仕事以外のことにも好奇心を持って、生きることを楽しまねば・・・と感じているようだ。

●最近の海外プロジェクト

安藤さんは今、オイルマネーで活況を呈している中東の国アブダビで海洋博物館の設計を行っている。関西新国際空港から夜11時30分頃のドバイ行きの直行便に乗ると、現地には早朝につける。その日1日仕事をして、26時（早朝2時）発の飛行機で戻ってくるというまさに弾丸出張を行っているようだ。

このプロジェクトは、世界中からフランク・ゲーリー、ジャン・ヌーベル、ザハ・ハディドと安藤さんの4人の建築家が選ばれた。設計料は前払いという好条件で仕事をしているが、どれも夢のような建築ばかりで、実際に建設されるのかは未知数である。因みに安藤さん担当の海洋博物館は、水上30m、海底30mという途方もないスケールで、水面の上と下が展示空間という計画案だそうだ。

欧州でも多くのプロジェクトを抱えている安藤さんだが、ベネチアのサンマルコ広場近くの「パラッツォ・グラッシ」という17世紀の建物の改装プロジェクトを行った。ビルのオーナーは、グッチ、サンローランなどスーパーブランドを傘下に治めるフランス人事業家ピノー氏。彼の要請によって、現代美術館に蘇らせた。グランドカナルに面したファサードには「Palazzo Grassi Tadao Ando」という大看板が掲げられていたようで、それを見た日本経団連の重鎮から「安藤さん、えらい大きな建物を買ったなあ」という連絡をもらったそうだ。会場は大爆笑。

同時期、安藤さんは、やはりベネチアのサンマルコ広場の対岸にある「プンタ・デラ・ドガーナ」という15世紀にできた税関の改築コンペに参加した。最終には、ザハ・ハディド+グッゲンハイム美術館、安藤+ピノーの2チームが残り、見事安藤チームが勝利した。設計コンセプトは、元の建物の囲いと屋根は残し、その中にさらにコンクリートでもう一つの建築をつくるというもの。ところが、そこはベネチア。コンクリートの基礎を造るために穴をあけると海水が噴出してきて、思った以上に困難な工事になっているそうだが、来年のベネチアビエンナーレに向けて急ピッチで進められている。ベネチアという小さな街に、2つの安藤作品が完成するのだ。

●安藤忠雄建築研究所はこんなところ

世界中に多くの建築プロジェクトを抱えている安藤さんの事務所のスタッフは約30人、それに常時5,6人のアルバイトがいる。地下2階、地上5階、中央に大きな吹き抜けのある建物で、もちろん安藤建築である。安藤さんの居場所は、玄関と勝手口の真ん中に置かれた大きなデスクだ。だから所員も訪問者も事務所に来るとまず安藤さんと鉢合わせすることになる。事務所の電話は5台。その全部が

玄関前のカウンターに置かれており、電話があると所員は消防署にあるようなはしご階段を伝って1階に下りてくる。もちろん話の内容は安藤さんに筒抜けであり、ご本人がすべて聞いている。自動的に所員の働きぶりや仕事の状況が把握できるという仕掛けだ。昼飯を食べに行くにも、安藤さんの前を通らねばならないので、「おい、どこ行くねん?」、「昼の食事です」、「早い!!」となることも…。但し、安藤さんが事務所に居ることはあまりないので、所員は心安らかだろうと考えている。しかし以前の日本では、上司が部下の仕事振りに口を挟むことは当たり前だった。コミュニケーションがストレートだったから「昔の人間の方が元気だった。それが全部なくなって、元気でなくなってしまった」と安藤さんは分析している。

最近入ってきた所員や学生さんのアルバイトを見ていて感じることは、若者の多くがチームワークを取れないこと。1日中コンピュータとにらめっこし、昼食もたった1人で出かける人が多い。オリンピックで星野ジャパンが負けた理由は、若い選手がチームワークを築けなかったことと分析する。

さて、事務所が手狭になって困っていたところ、隣接するビルが空き家になった。そこで安藤さんは2階部分だけ買って、壁をぶち抜いて本館とつなげてしまった。2階部分しか購入していないが、5階建てのビル全体を買ったと同じ意味があると考えている。

● 枠組みを超える・・・サントリー美術館

安藤さんが設計した「サントリー美術館」の隣は、ボストンのケンブリッジ・セブンが設計した「海遊館」という水族館があり、年間300万人の来場者がある。大阪市にとってこれは大成功プロジェクトだったが、安藤さんは「失敗の始まり」だったと考えている。理由は、海遊館の成功は、大阪市の箱物行政を促進し、それが要因の一つとなって5兆円もの借金か抱えてしまうことになったからだ。失敗は成功の始まり…ならぬ、成功は失敗の始まり…か。

さて、安藤さんはサントリー社長だった故佐治敬三さんの依頼で美術館を設計した。当時は、初めての大型プロジェクトで少しだけ躊躇した安藤さんに対して、「情けないこというな。やってみろ。思い切って行け。責任とってやる」と、いかにも大阪人らしく力づけてくれたそう。ところが、出来上がった建築をみたら「おまえが全部責任とれ」。面白い人だった。

面白いといえば、関経連と東洋紡の会長をした宇野収さんは、サムエル・ウルマンの「青春」という詩の中の「青春とは人生のある期間ではなくて、心の持ち方をいう。20歳の青年よりも60歳の人に青春があることもある。年を重ねただけで人は老いないけれども、理想を失ったときに初めて老いる」という一節を安藤さんに語ってくれた。この一節は今も安藤さんの脳裏に深く刻まれている。なぜなら「今、日本の国には心がない、理想を見失っている」と痛感しているからだ。先の佐治さんは「おまえはおもしろいから、最後まで大阪から青春かけて走れ。迷惑はいい。そんなものはすぐ消えていくんだから、どんどん行け」と、安藤さんを励ましてくれたそう。あれから30年、今、日本人は青春を生きていないと感じている。

さて、安藤さんはサントリー美術館のプロジェクトでは、建物だけでなく目前に広がる大阪湾の護岸部分も含めて勝手に設計した。周辺の環境も含めてデザインしたのだ。ところが、日本の行政は縦割り組織、護岸は建設省、海は運輸省が管轄しているから、実行するためには並々ならない行動力が求められる。普通の人なら、いちいち説得して回ると考えただけで躊躇してしまうところだ。しかし

安藤さんは、横のつながりや情報交換を行わない日本の縦割り行政の盲点を上手く使って、自分のデザインを見事、実現した。それが可能だったのは、もちろん安藤さんの都市、生活者に対する確固たるビジョンとイメージがあったからだ。

ところが、こんな設計だと、海に落ちる子どもが出てくる…という意見がもち上がった。子どもからリスクをとことん排除するという風潮が、現在の無気力な若者を大量に生み出す原因だと語る。

●最近のプロジェクトから

・表参道ヒルズ

「表参道ヒルズ」は、2006年に渋谷区神宮前の同潤会アパート跡地に建設された複合施設。安藤さんは、森ビルから設計依頼を受けたときに「心の中の風景というのは大事にせにゃいかん」と考えたそう。ヨーロッパの価値観では、第二次世界大戦で破壊された教会や街並みをそのままに復元することは当たり前。表参道でも美しいケヤキ並木の風景をしっかりと残し、継承しなければならないのだ。安藤さんはさらに、屋上緑化によって、さらに緑を増やすことを計画した。

建物は地下6階、地上⑥階、表参道に沿って長さ300メートルという大建築だ。しかも地下鉄が平行に走っているために慎重さを求められる工事現場であったが、日本の優秀な施工技術と現場監督のお陰で、きちんと予定通りに建設することができた。

・21__21デザインサイト

続いて、六本木の東京ミッドタウンの一角にある「21__21デザインサイト」の設計も担当した。ここはファッションデザイナーの三宅一生さんがディレクターを務めるデザインミュージアム。建物は一生さんの「一枚の布」をヒントに、鉄製の強大な一枚屋根が、公園の緑の中にはらりと舞い降りた様子をイメージした。コンセプトはずばり「一枚の鉄板」。その鉄板の厚さは20mm。しかしこれだけの厚さをもつ鉄板を不陸がなく真っすぐにつくるのは非常に困難だ。担当者はこれをつくるために1カ月に1回しか家へ帰らず、現場に泊り込んで頑張ってくれた。彼自身本当に建築が好きだったのでだろうと安藤さんは振り返る。現在ミラノでジョルジオ・アルマーニの本社と美術館を手掛けており、鉄板を使いたいが、日本でしかできない技術なのだそう。このように日本にしかない技術は多いが、将来、20代の若者たちが継承できるかどうか…ほぼ絶望的だと安藤さんは見ている。

・新渋谷駅

2008年6月にオープンした新渋谷駅も安藤さんが手掛けている。地下30m、長さ100mという巨大空間、地下鉄のコンコースである。ここは安藤さんの処女作である「住吉の長屋」と同様に、自然光と風が入ってくる構造。地上までつながる吹き抜けを通して、電車の排熱による上昇気流を利用して、自然に換気を行っている。環境負荷を減らし、CO₂排出削減に貢献している。また、地下を歩いていると自分の立ち場所が分からなくなって不安を感じることもあるが、この駅は自分がいる場所がしっかり分かる設計になっている。

実は、安藤さんに設計依頼があった時点では既に土木工事はできていた。安藤さんは床に大きな穴をあけるといって、とんでもない提案をしたわけだ。まずは施主である東急と東京都を説得しなければ

ならない。ビジョン実現のための説得は安藤さんの真骨頂。結局、穴はあいた。「東京の中の駅はもっと魅力的じゃなければいけない」と考える安藤さんは、駅が空間的な魅力を持つことはもちろん、託児所やショップなど、駅がさまざまなサービスの場として機能し、だれもが安全に安心して活用できる場にしたいという。

●未来の子どもたちのために

・東京オリンピック招致

現在、東京は2016年のオリンピック開催都市に名乗りをあげている。安藤さんは招致プロジェクトの総監督として、主に施設整備に提言を行っており、1964年に建設された丹下健三さんの国立代々木競技場などの施設を全部補強し、保存すべきだと主張している。競技団体の中には反対している委員もいる。スポーツ振興のために、新しい施設を建設したいと考えているからだそう。

そこで安藤さんは、新たな建築物はすべて国際コンペで決定する。同時に、IT、風力発電、太陽エネルギー、大型液晶パネルなどあらゆる基盤システム導入もコンペで選定し、価値の向上と価格の抑制を狙うべきだという。このような政策を採ることによって、さまざま政治的圧力がかった北京オリンピックに対して、「開かれた都市・自由な都市、東京」というイメージを広めて、東京の優位性を高めたいと全体構想を練っている。

2カ月ほど前、オリンピック候補として東京、シカゴ、マドリード、リオデジャネイロが最終候補地として残った。東京は、公共輸送の充実、食が安全で衛生的、平和である、日本人の民度が高いなどの理由で、1位の成績を収めているそう。さらなる民度の向上のために、都心部では地下鉄、鉄道、バスなどの公共交通を利用することを前提とし、自主的にクルマの量とCO₂を減らせば、評価は一層高まるだろうと安藤さんは分析している。しかし同時に、これからもオリンピック招致に向けた、政治的な働きかけも含めたプロモーションは重要なだろう。

・海の森募金

東京都心のマップを映し出しながら、安藤さんは東京湾にポッカリ浮ぶ森を指した。皇居とほぼ同じ100haの森。そこは産業廃棄物を捨てていた高さ30mのゴミの山に土を盛って、全部森にすると計画されているエリアだ。緑化する費用は、50万人の1,000円募金で賄う。1,000円で苗木1本を植樹する。

現在、東京はヒートアイランド現象によって温度上昇が止まらない。一方都心の真ん中にある皇居は周辺に比べて3℃低いそう。 「陸の森」である皇居から街路樹をネットワークして、「海の森」に至る風の道をつくることによって、都心部も多少は涼しくなるのではないかと、安藤さんは考えている。未来の子どもたちにきちんとした環境を残すのは大人の役割なのだ。

実現に向けて、安藤さんは「50万人から1000円募金」のために精力的に行動している。その輪は、前フランス大統領のシラク氏、U2のボノ氏、ビル、ワンガリ・マータイさんにまで広がっている。U2のボノさんは、実は安藤建築の大ファン。現在ダブリンのボノ邸を設計している。このような努力の積み重ねによって、今、20万人から2億円近くの支援が集まった。もちろんまだまだである。

・小さい積み重ね

地震国、日本の環境整備は、今まで見逃されていたような些細な場所からも始められる。安藤さんが注目しているのは、地域の公園や小学校に設置されている防災基地、大きな事故をもたらす可能性のある電柱の地中化、鉄道斜面の緑化などだ。

日本では震災に備えて地域の公園や学校施設が防災基地として指定されている。しかし、的確な情報やネットワークが住民レベルにまで浸透していない。より積極的に整備していくべきだと安藤さんは考えている。また、東京都では、10年以内の電柱地中化計画が進んでいるが、電柱を埋めると同時に、共同溝をつくってガスや電話などのライフラインをきちんと治めていくべき。そして、阪急、JR、東武、東急など鉄道の線路脇の斜面は全部緑化すべきとも主張する。このように地道で些細な試みが、環境をつくっていく一歩なのだ。

最後に、安藤さんは、明治時代に日本に来た外国人が「子どもが生まれてきて一番幸せな国は日本だ」、1960年代C.W.ニコルは初めて日本に来たときに感じた「日本の子どもたちの目が輝いている」、しかし現在は「みんな目が死んでいる」という言葉を引用し、「日本という国を、子どもが生まれてきて世界一幸せな国にしなければならない」と語る。

さらに「地球全体に目を向けよう」と続けた。100年前は10数億であった人口が、現在は66億、2050年は90億になると見込まれている。同時に、環境、エネルギー、食糧など悪化や不足という人類共通の問題がある。「日本はこうした課題に対して先頭に立つべきだし、世界中の人から注目される、活力ある国を再構築しなければならない。そのために、あらゆる国の人たちが同じ地球上で生きていることの自覚が重要であり」「日本は何とかなるだろう・・・では、何ともなりません！」と締めくくった。

2008年度第5回物学研究会レポート
「不況ニッポン、どうするか」

安藤 忠雄 氏

(建築家)

写真・図版提供

01；物学研究会事務局

編集=物学研究会事務局

文責=関 康子

- [物学研究会レポート] に記載の全てのブランド名および商品名、会社名は、各社・各所有者の登録商標または商標です。
- [物学研究会レポート] に収録されている全てのコンテンツの無断転載を禁じます。